

# 5. 爬虫類

---

## 選定・評価方法の概要

東京都産（本土部）の爬虫類は外来種を除き 13 種であり、その内訳はカメ類 2 種、トカゲ類 3 種、ヘビ類 8 種である。前回（本土部レッドリスト 2010）の東京都レッドリストでは外来種である可能性を示しつつもクサガメを評価対象としていたが、2010 年からの 10 年間でクサガメが外来種であることを支持する研究結果が複数発表されていることを考慮し、今回はリストから除いた。その結果、今回の掲載種は前回の 14 種から 1 種減少している。

絶滅のおそれのある評価は、基本的に定性的要件を用いた。東京都産の爬虫類に関しては、分布、生息状況に関する客観的データが極めて少なかったため、水田・森林面積の推移、及びリスト作成のための検討委員による野外観察情報を参考に評価作業を行った。

## 選定・評価結果の概要

評価作業の結果、全 13 種がレッドリストの掲載種に選定された。

ニホンイシガメ、ニホンスッポンについては、それぞれペット用、食用としての流通が以前より多く、そのことを考慮すると、自然分布ではなく放逐された個体が多くを占める可能性が高い。しかし、分布状況の調査、及び遺伝的調査が十分に実施されているとは言えず、在来個体の存在が完全に否定できる証拠はない。また、前回の東京都レッドリスト改定時と比較して生息環境が増加したとも言えないため、前回の評価を保持することにした。なお、本評価に影響を与えるものではないが、この 2 種のカメが生息できる環境が東京都内に存在することは、高く評価されるべきものであろう。

ニホンヤモリは、シナントロプ\*の代表ともいえる生物で、現時点で絶滅のおそれはないが、個体数の推移に留意が必要である。古い木造の住宅が減り、現在の気密性の高い住宅に置き換わっている状況は本種の生息できる環境の減少につながっている可能性が高い。また、餌となる昆虫類の生息状況も個体数に大きく影響を与える要因となることから、注意を払う必要がある。ニホンカナヘビは日当たりの良い草地等を好んで生息するが、区部では見かけることが減っていることから、急激に個体数が減少している可能性が高く、区部のランクを前回の VU から CR+EN に上げた。原因としては、都市化により雑草が放置されている場所が減少したこと、餌となる昆虫類が減少したことの両方が考えられる。



ニホンカナヘビ

小型で地中性のタカチホヘビは人目につきにくく、生息数を把握することが難しい。しかし、極めて乾燥に弱く、宅地化が進んだ区部、北多摩では生息していないか、局所的にしか生息していないと考えられるため、データは少ないものの CR と評価した。同様に夜行性で人目につきにくいシロマダラもデータが少ないが、北多摩には生息環境が少ないと思われるので、前回の DD から CR+EN に評価を変更した。ヤマカガシはカエル類を主な餌としていることから、カエル類の個体数に強く影響を受けると考えられる。北多摩、南多摩ではカエル類が好んで生息する水田が減少しており、その結果、本種の個体数が 10 年前より大きく減少したことが推測され、野外での目撃例も減っているようである。したがって、北多摩、南多摩の評価を変更し、前回の VU から北多摩では CR、南多摩では EN にランクを上げた。前回の総説にもヤマカガシが著しく減少していることに触れられているが、この 10 年でさらに大きく個体数が減少した可能性が高く、今後の推移にきわめて注意を要するもののひとつである。また、ヤマカガシほどではないもののシマヘビもカエル類を餌とするヘビ類であり、水田等の水辺周辺を好む。南多摩の水田が減少していることから、評価を NT から VU に変更した。

毎年同じ場所で繁殖が観察される両生類とは異なり、少ない回数の野外調査で爬虫類の生息状況を把握することは難しい。特に隠蔽性の高いジムグリ、シロマダラ、タカチホヘビでは、気づかずに個体数が急激に減少することも起こりうるため、樹林地面積の減少等に注意を払う必要がある。一方、比較的目的につきやすいニホンカナヘビ、ヤマカガシの目撃例が減少していることには、注視しておく必要がある。特にニホンカナヘビの減少の原因が何であるかは明らかではなく、今後の慎重な調査が求められるであろう。



ヒキガエルを捕食するヤマカガシ

\*シナントロプ *Synanthrope* 寄生や家畜化ではなく野生の生活を堅持しつつも人間の生活活動によって得られる利益を最大限に利用して種の維持繁栄をはかる野生動物。ニホンヤモリのほかにドバト、スズメ、ハシブトガラス、ドブネズミなどが該当する。

(坂田 修一)

### 引用文献

疋田努・鈴木大, 2010, 江戸本草書から推定される日本産クサガメの移入, 爬虫両棲類学会報, 2010 (1): 41-46.

### 写真提供者

野村亮、認定 NPO 法人 生態工房

### ニホンイシガメ

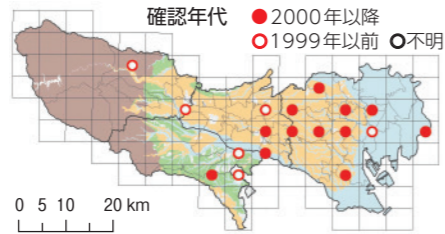
*Mauremys japonica*

カメ目  
イシガメ科

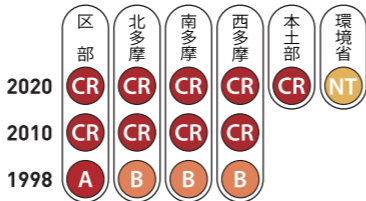
■種の特性と生息状況：甲長13～20 cm程度で、雌の方が大きい。背甲は褐色で、それぞれの甲板の縁は黒いことが多い。腹甲は黒色。背甲の後縁はクサガメなどと比べるとギザギザしているが、老齢の個体では目立たないこともある。前後肢の後ろ側に黄色い縦状の模様がある。雑食性で藻類などの植物、昆虫、甲殻類、魚類などを食べる。本州、四国、九州と周辺島嶼の河川、湖沼などに生息し、下流域よりも山間部に多いが、都内では区部で見つかることも多い。

■生存を脅かす要因：森林伐採、河川開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少の他、アライグマなどの外来種による捕食や、外来種とみられているクサガメとの交雑などが生存を脅かす要因となっている。

■特記事項：本種はペットとして古くから商業流通があり、飼育個体が遺棄されたり、脱走したりすることも多い。都内で見つかる本種は、地域在来のものではない可能性があり、注意が必要である。



執筆者 坂田修一 文献一覧 1, 6



三鷹市 2020年

### ニホンスッポン

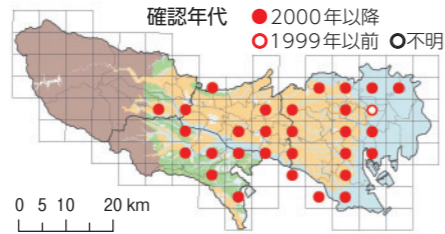
*Pelodiscus sinensis*

カメ目  
スッポン科

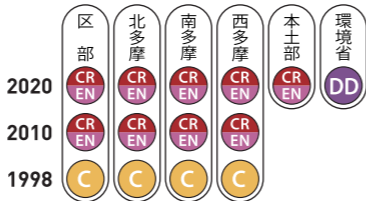
■種の特性と生息状況：甲板をもたず、吻端が突出していることから在来他のカメと容易に識別できる。甲長30 cm程度まで成長する。背甲は緑褐色、または灰褐色。幼体の腹甲は赤褐色で暗色の大きな斑紋を伴うが、成長とともに様に白色または黄白色となる。四肢のみずかきは発達する。貝、甲殻類、昆虫、魚類などを捕食し、肉食傾向が強いが、植物も食べる。日本では本州以南に分布するが、琉球列島のは人為的に持ち込まれたと考えられている。河川、湖沼などに生息し、産卵時以外は陸上を移動することは少ない。都内では多摩地域でも区部でも見つかる。

■生存を脅かす要因：森林伐採、河川開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少などが生存を脅かす要因となっている。

■特記事項：本種は食用として古くから養殖され、外来起源の個体が国内に定着し、在来個体群と交雑している可能性が示唆されている。そのため、都内で見つかる本種についても、注意が必要である。



執筆者 坂田修一 文献一覧 1, 6



三鷹市 2018年

### ニホンヤモリ

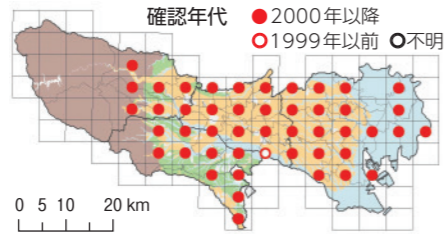
*Gekko japonicus*

有鱗目  
ヤモリ科

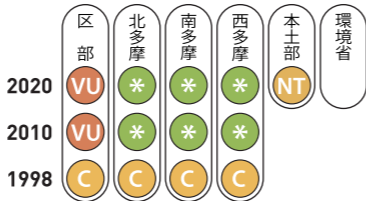
■種の特性と生息状況：頭胴長5～7cm程度で、同程度の長さの尾をもつ。背面は灰色で、正中線に沿って不明瞭な暗色の斑紋が見られる。腹面は背面よりも白っぽい。全身を細かい鱗に覆われ、四肢の指先の腹面側には「指下薄板」と呼ばれる板状の構造がある。夜行性で、人家周辺でよく見られ、電灯などに集まる昆虫を待ち構えている様子が観察されることも多い。主に昆虫などの小型無脊椎動物を捕食する。日本では本州、四国、九州と周辺島嶼に分布し、近年は北海道南部にも侵入している。都内でも広く見られるが山地で見つかることは少ない。

■生存を脅かす要因：本種は人家などの人工的環境に依存している。古い木造建築物が減り、近代的な気密性の高い建築物に置き換えることにより、生息できる環境が減少していると考えられる。

■特記事項：国外では中国中東部、朝鮮半島などに分布し、日本の個体群は人為移入である可能性が示唆されている。



執筆者 坂田修一 文献一覧 1, 6



練馬区 2011年

### ヒガシニホントカゲ

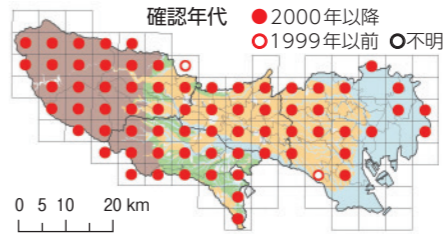
*Plestiodon finitimus*

有鱗目  
トカゲ科

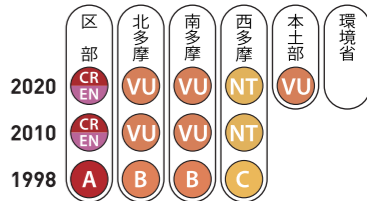
■種の特性と生息状況：頭胴長6～10cm程度で、尾の長さは頭胴長の1.5～2倍程度。成体の背面はやや緑色がかった褐色で、体側部には暗色の縦条がある。成熟した雄の頭部は繁殖期には鮮やかな橙色になる。幼体の色彩は成体と異なり、背面は黒色で尾は青い。また、胸部に5本の白色、または黄白色の明瞭な細い縦条がある。昼行性、地上性で森林、市街地、農地などで見られる。昆虫やミミズなどの小型無脊椎動物を主に捕食する。北海道、本州の東北から近畿地方東部、南部に分布する（伊豆半島と周辺部を除く）。都内では全域で見られるが区部では多くない。

■生存を脅かす要因：森林伐採、草地開発、市街地開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。日光浴場所や隠れ家となる石垣の減少も影響が大きいと考えられる。

■特記事項：2012年に新種記載されるまでは、ニホントカゲと同種とされていた。



執筆者 坂田修一 文献一覧 1, 6



三鷹市 2017年

### ニホンカナヘビ

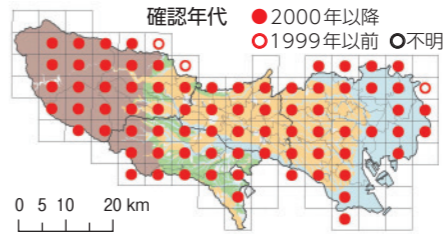
*Takydromus tachydromoides*

有鱗目  
カナヘビ科

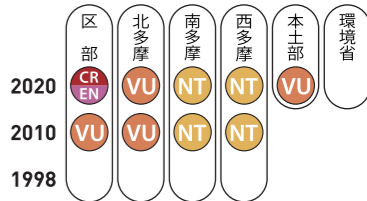
■種の特性と生息状況：頭胴長6～7cm程度で、尾が長く頭胴長の2～3倍程度に達する。背面は褐色で、体側部には暗色の幅広い縦条とその下方に平行する白色の細い縦条がある。腹面は白色または淡黄色。鱗には隆条があり、ヒガシニホントカゲなどと比べて全身がザラザラしている。平地、低山地の低い草むらなどを好み、地上と草の上の両方を利用する。昆虫やクモなどの小型無脊椎動物を主に捕食する。北海道、本州、四国、九州と周辺島嶼に分布し、都内では全域で見られる。

■生存を脅かす要因：森林伐採、草地開発、市街地開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。特に草地の消失は本種の生存に大きな影響があると考えられる。

■特記事項：



執筆者 坂田修一 文献一覧 1, 6



練馬区 2013年

### タカチホヘビ

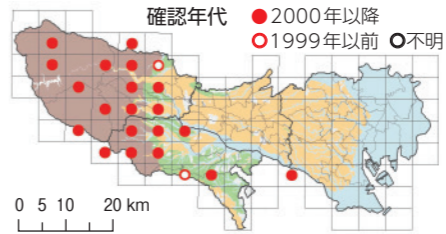
*Achalinus spinalis*

有鱗目  
タカチホヘビ科

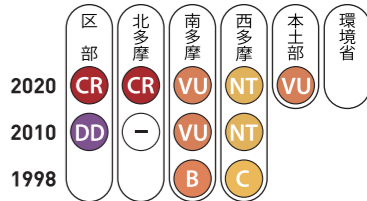
■種の特性と生息状況：全長30～60cm程度。都内に分布するヘビの中ではもっとも小さい。背面は褐色で幼体の方が黒っぽい。正中線上に黒い縦縞模様があるが、基色が黒っぽい個体では目立たない。鱗には構造色の光沢がある。主にミミズを捕食する。低地から山地の森林に生息するが、夜行性で日中は倒木、石の下、落ち葉の下などの湿った場所に隠れているため人目につきにくい。本州、四国、九州と周辺島嶼に分布し、都内では南多摩、西多摩の丘陵地、山地にほぼ限られる。

■生存を脅かす要因：森林伐採などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。また、夜行性で人目につきにくい生態が個体数減少を気づきにくくさせている可能性もあり注意が必要である。

■特記事項：



執筆者 坂田修一 文献一覧 1, 6



町田市 2009年

### シロマダラ

*Lycodon orientalis*

有鱗目  
ナミヘビ科

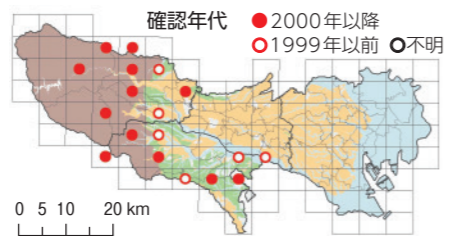
■種の特性と生息状況：全長30～70cm程度。比較的細長い体型で頭部が目立つ。背面は薄い灰色、または灰褐色で、胴部から尾部まで黒い横斑状の模様がある。頭部は黒褐色で側頭部から後頭部にかけて白い模様があるが、成体では目立たない場合もある。主にトカゲ類や小型のヘビを捕食する。低地から山地までいろいろな環境に生息するが、夜行性で日中は倒木、石の隙間などに隠れているため人目につきにくい。北海道、本州、四国、九州と周辺島嶼に分布し、都内の発見例は少なく南多摩、西多摩の丘陵地、山地にほぼ限られる。

■生存を脅かす要因：森林伐採、市街地開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。餌となるトカゲ類の生息状況が本種の生存に大きく影響すると考えられる。また、夜行性で人目につきにくい生態が個体数減少を気づきにくくさせている可能性もあり注意が必要である。

■特記事項：

執筆者 坂田修一

文献一覧 1, 6



日の出町 2016年

### ジムグリ

*Euprepiophis conspicillatus*

有鱗目  
ナミヘビ科

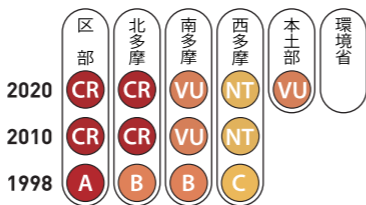
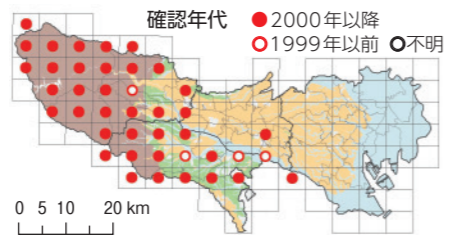
■種の特性と生息状況：全長70～100cm程度。頸部が太く、頭部が小さい。背面は褐色で赤みがかかる個体もいる。また、背面に細かい黒斑模様があることもある。幼体は赤みが強く、頭部には曲がった帯状の、胴部には斑紋状の黒い模様が目立つ。主に日中に地上で活動し、小型哺乳類を食べる。低地から山地の森林などで見られる。北海道、本州、四国、九州と周辺島嶼に分布し、都内の分布は南多摩、西多摩の丘陵地、山地にほぼ限られ、区部、北多摩の都市部ではほとんど見られない。

■生存を脅かす要因：森林伐採などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。特に餌となる小型哺乳類が生息する森林の減少に注意する必要がある。

■特記事項：

執筆者 坂田修一

文献一覧 1, 6



あきる野市 2016年

### アオダイショウ

*Elaphe climacophora*

有鱗目  
ナミヘビ科

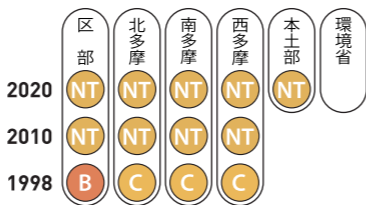
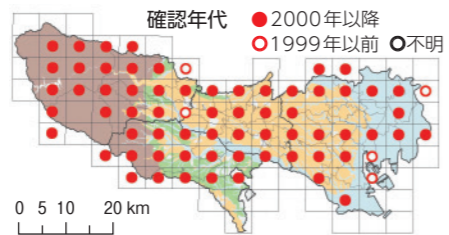
■種の特性と生息状況：全長110～190cm程度で東京都内に分布するヘビの中では最大。背面は緑色がかった褐色で、暗色で不明瞭な4本の縦縞模様があることが多い。腹面は背面よりも色が薄い。幼体の体色は成体よりも全体に明るく、暗色のはしご状の模様が入る。地上でも活動するが木に登るのも得意で、樹上にいるところが見つかることも多い。主に小型哺乳類、小型鳥類を捕食する。低地から山地の林道、田畑、河川で見られ、都市部の公園などで見つかることも多い。北海道、本州、四国、九州と周辺島嶼に分布し、都内でも全域で見られる。

■生存を脅かす要因：森林伐採、市街地開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。

■特記事項：幼体はその模様からしばしばニホンマムシと誤認される。

執筆者 坂田修一

文献一覧 1, 6



八王子市 2020年

### シマヘビ

*Elaphe quadrivirgata*

有鱗目  
ナミヘビ科

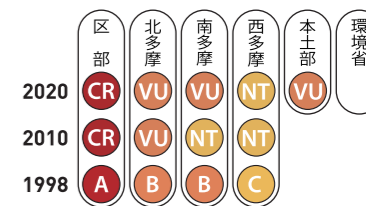
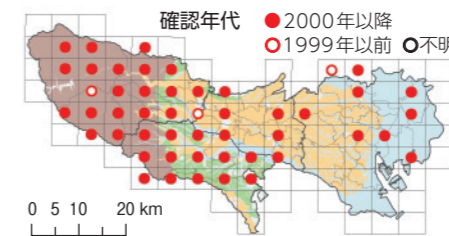
■種の特性と生息状況：全長80～150cm程度。変異が大きい、一般的な個体では褐色の背面に暗色の4本の縦縞模様がある。縦縞模様は明瞭であることが多い、目立たない個体やまったく無い個体も存在する。また、「カラスヘビ」と呼ばれる全身が黒化した個体も存在する。幼体は成体よりも赤っぽく、また背面の縦縞は縦縞ではなく斑紋状である。主に日中に地上で活動し、両生類、爬虫類、鳥類、哺乳類などを食べる。低地から山地の開けた場所がよく見られ、水田周辺にも多い。北海道、本州、四国、九州と周辺島嶼に分布し、都内全域に分布するが区部で見つかることは多くない。

■生存を脅かす要因：森林伐採、市街地開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。

■特記事項：

執筆者 坂田修一

文献一覧 1, 2



日の出町 2016年

### ヒバカリ

*Hebius vibakari vibakari*

有鱗目  
ナミヘビ科

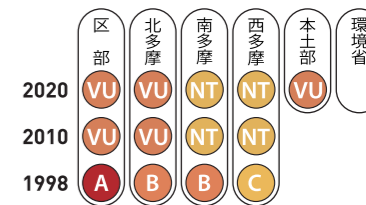
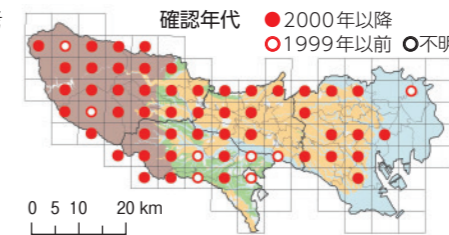
■種の特性と生息状況：全長40～60cm程度。背面は褐色で幼体はより黒っぽい。上唇は白っぽい黄色で頸部の帯状の模様につながる。腹面は白っぽい黄色で、腹板（腹面の大きな鱗）の左右にひとつずつ黒色の斑点があるため破線のように見える。朝、夕、日没後に活動することが多く、カエル類、ミミズ、魚類を捕食する。低地から山地の森林や水田で見られ、水中に入ること多い。本州、四国、九州と周辺島嶼に分布し、都内全域で見られるが生息できる環境は限られており、区部では見られることは少ない。

■生存を脅かす要因：森林伐採、河川開発、圃場整備、市街地開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。特に餌となるカエル類（幼生含む）が住める環境の減少は本種の生存に影響が大きいと考えられる。

■特記事項：

執筆者 坂田修一

文献一覧 1, 3



福生市 2012年

### ヤマカガシ

*Rhabdophis tigrinus*

有鱗目  
ナミヘビ科

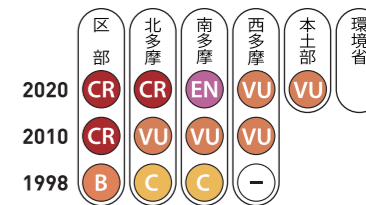
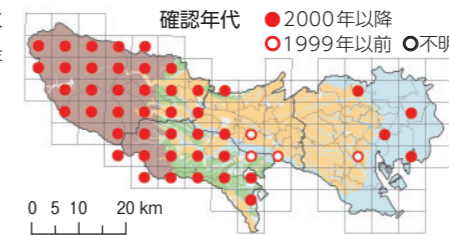
■種の特性と生息状況：全長65～100cm程度。色彩と模様の変異が大きい。都内に分布する個体では緑褐色の基色で、胴部前半では赤みが強く、黒い斑紋が入ることが多い。幼体の色彩はより鮮やかで、模様がはっきりしているが基本的な色彩、模様は成体と変わらない。胴部の鱗にはキール（隆起した条（すじ））があり、光沢が少ない。主にカエル類を捕食する。低地から山地の森林、河川、水田などで見られ、水辺付近で見つかることが多い。北海道、本州、四国、九州と周辺島嶼、都内では南多摩、西多摩の丘陵地、山地を中心に分布し、都内区部、北多摩の都市部では非常に稀である。

■生存を脅かす要因：森林伐採、圃場整備、市街地開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。特に水田減少に伴うカエル類の減少は、本種の生存に大きな影響があると考えられる。

■特記事項：おとなしいが有毒。

執筆者 坂田修一

文献一覧 1, 4



日の出町 2005年

## ニホンマムシ

*Gloydus blomhoffii*有鱗目  
クサリヘビ科

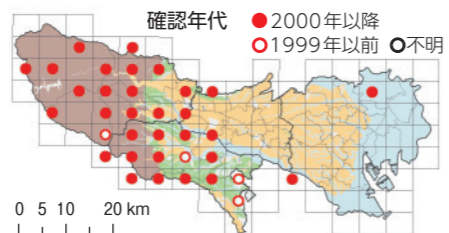
■ **種の特性と生息状況**：全長40～65cm程度。太短い体型で頭部が大きい。背面は通常は黄褐色から灰褐色で、円形の斑紋が並ぶ。この斑紋は縁の色が濃く、また中央部に暗色斑紋がある。胴部の鱗にはキール（隆起した条（すじ））があり、光沢が少ない。鼻孔と目の間に熱を感じるためのピット器官があり、都内に分布する他のヘビと識別できる。両生類、爬虫類、小型哺乳類などを捕食する。低地から山地の森林、河川、田畑などさまざまな環境で見られる。北海道、本州、四国、九州と周辺島嶼、都内では南多摩、西多摩の丘陵地、山地を中心に分布し、都内の区部、北多摩の都市部では非常に稀である。

■ **生存を脅かす要因**：森林伐採、圃場整備、市街地開発などの各種開発による生息場所、餌生物の減少が個体数減少の要因となる。特に水田減少に伴うカエル類の減少は、本種の生存に大きな影響があると考えられる。

■ **特記事項**：おとなしいが有毒。

執筆者 坂田修一

文献一覧 1, 5



	区部	北多摩	南多摩	西多摩	本土部	環境省
2020	CR	CR	CR	EN	EN	
2010	CR	CR	CR/EN	EN	EN	
1998	B	C	C	-		



日の出町 2011年

## 文献一覧

1. 関慎太郎 (2016) 野外観察のための日本産爬虫類図鑑 第2版. 緑書房: 216pp.
2. 日本爬虫両棲類学会 編 (2021) 178. シマヘビ, 新日本両生爬虫類図鑑: 171-172. サンライズ出版.
3. 日本爬虫両棲類学会 編 (2021) 184. ヒバカリ, 新日本両生爬虫類図鑑: 178. サンライズ出版.
4. 日本爬虫両棲類学会 編 (2021) 189. ヤマカガシ, 新日本両生爬虫類図鑑: 182-184. サンライズ出版.
5. 日本爬虫両棲類学会 編 (2021) 201. ニホンマムシ, 新日本両生爬虫類図鑑: 195-196. サンライズ出版.
6. 日本爬虫両棲類学会 編 (2021) 新日本両生爬虫類図鑑. サンライズ出版: 234pp.

写真提供者一覧 (爬虫類)

認定 NPO 法人 生態工房、野村亮、山崎文晶